
真・恋姫無双Chronicle

吟遊詩人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双Chronicle

【Nコード】

N1537Z

【作者名】

吟遊詩人

【あらすじ】

さて、語りましょう。本来存在しなかったはずのものふの物語を。

彼はその強靱な意志で持つて時代を駆け抜けたものふ。

その意志は、たとえ異なる世界においても変わるものではなかったのです。

さあ、語りましょう。しがなクロニクルい吟遊詩人が語る一人のもののふと、
その仲間たちの年代記クロニクルの始まりです。

序章 大阪夏の陣（前書き）

どうも、吟遊詩人でございます。これは戦国無双クロニクルと恋姫無双のクロス小説です。

オリジナル設定が多々ありますが、よろしければ読んでみてください。さ。

序章 大阪夏の陣

慶長二十年：今、戦国の時代が終わろうとしていた。天下を統一した豊臣秀吉の没後、天下第二の実力者であった徳川家康が台頭。あくまでも豊臣の天下に固執する豊臣家旧臣・石田三成は家康を排除する動きを見せ始める。

それに対し加藤清正、福島正則らは豊臣の家を護るために家康に臣従。長きに渡って豊臣を支え続けてきた三成、清正、正則らは袂を別つこととなった。そして家康が会津の上杉討伐の兵を上げると三成は挙兵。それを受けて家康も反転し、両軍は関ヶ原でぶつかり合った。

関ヶ原の戦いは西軍総大将は石田三成。対して東軍総大将は徳川家康、そして東軍の先鋒は三成の友・福島正則であった。

当初は拮抗していた両軍だが、西軍の小早川秀明の裏切りを皮切りに西軍は崩壊。僅か一日で決着がつくこととなった。三成は戦場から落ち延びたものついに捕えられ、五条河原で処刑された。

その後、家康は江戸に幕府を開き、徳川の天下を盤石のものにしていった。しかし、豊臣の存続を願っていた清正、正則ら豊臣旧臣が没するについに家康は豊臣を討つために動き出す。

大坂冬の陣では真田幸村らの奮闘でどうにか凌ぎ、講和に持ち込むも家康はその講和の条件である外堀を埋めるだけでなく、内堀も埋めることで天下の堅城と謳われた大坂城を丸裸にしてしまう。

そしてついに家康は豊臣を滅ぼすべく、丸裸になった大坂城を攻めた。慶長二十年の戦国最後の大战『大坂夏の陣』である。

「もののふの意地が：今、力を、時代を超えようとしている！行くぞ！狙うは家康公の首のみ！！」

戦場で、豊臣方・真田幸村が味方に激を飛ばす。当初、徳川の圧勝と予想されたこの戦は真田幸村を初めとする豊臣方の将たちの奮戦によって徳川方を押し返していた。今、徳川と言う強大な力に抗うため、四人のものふが一丸となって徳川本陣へと突っ込んでいた。

「幸村様、あたしも…地獄の底までお供します！」

一人は真田幸村を慕う女忍者『くのいち』

「あたしたちの絆の突撃、止められるもんなら止めてみなさい！」

一人は成田氏長の長女『甲斐姫』

「真田の戦、これに見よ！」

一人は真紅の甲冑に身を包んだ猛将『真田幸村』……そして……

「来い…！」

織田信長、豊臣秀吉から全幅の信頼を寄せられた……『河越夜戦』

からこの『大坂夏の陣』までを生き抜いた歴戦の勇将、白い甲冑をその身に纏い、太陽が如き家紋をその身に背負うもののふ……『くもゆうすけ 叢むら雲雄介』
四人のものふは互いの背中を護り、まさに鬼神の如き強さを持って家康の本陣へと向かう。

「真田幸村／村雲雄介、見参！！家康公、御首頂戴仕る！！！！」

雄介と幸村、二人の声が重なると同時に眼前の兵が雄介の大太刀『七代伊坐那岐』と幸村の十文字槍『炎槍素戔鳴』によって切り伏せられる。二人の背後にはその背を護るようにくのいちと甲斐姫が武器を構えている。

「家康公、ご覚悟！」

雄介と幸村が家康へと武器を向ける。しかし、家康の傍にいた旗本が慌てて家康の前に入り、家康の旗印を倒しつつも雄介と幸村を牽制する。その隙に家康の周りに徳川兵が殺到し、十重二十重に家康を囲んで雄介たちに相對する。

「三河で信玄公に倒されて以来、一度も倒されることがなかった旗印が……！？」

家康は倒れた旗印を見てそう呟く。それはつまり、現在の家康が武田信玄の時と同様に追い詰められていることを意味する。家康は真つ直ぐに雄介たちを見据え、口を開く。

「……もう意地は十分見せたであろう？お主らの戦ぶりは後世に語り継がれる。……約束しよう。お主らの志は、わしが未来へと繋ぐ」

それを聞き雄介と幸村は微笑んで武器を下ろす。

「一歩及ばず…されど悔いなし…雄介殿、いったん退きましよう」

幸村は雄介に向き直る。その言葉に雄介も頷きを返した。

「ああ…そうだな…」

言葉少なく、幸村に肯定の意を示して二人は家康に背を向ける。そして二人の背を護っていたくのいちと甲斐姫もそれに習って退いていく。

「…皆、もう戦は決した。幸村らの退路を開けよ」

そう、雄介たちの突撃は徳川本陣に達するという偉業をなしたものの、その間にすでに大坂城からは火の手が上がっている。もはや豊臣方の勝利はない…雄介と幸村は家康に一礼すると、くのいちと甲斐姫を引き連れて徳川本陣から脱出した。

「…まさに、日ノ本一の兵なり…」

本来の歴史において、幸村一人に送られた賛辞は…徳川本陣まで突入してきた四人のものふたちに送られた…

そして慶長二十年、五月七日深夜…大坂城は落城、豊臣秀頼は自害。天下は徳川幕府のもとに一つになり、戦国の世はここに終結した。

だが……戦勝に沸く徳川陣の中で、一人の将が姿を消したことに
気付く者はいなかった。

序章 散り逝く者（前書き）

これで序章は終わりです。一つ付け加えると本小説に登場する無双キャラたちの武器は全てユニーク武器です。なので武器に属性がついています。

もし良かったら後書きもご覧ください。

序章 散り逝く者

徳川本陣脱出後、雄介たち四人は大坂の山中で身体を休めていた。幸いにも徳川方は豊臣を滅ぼしたこと、主要な武将のほとんどが討ち取られたことで大々的な落ち武者狩りは行われていなかった。最も、この辺は家康自身も豊臣が滅んだ以上、雄介や幸村がこれ以上反抗をするとは考えていないし、ものふの意地を見せつけた当人たちも家康に戦いを挑む気はない。

「で、これからどうしましょう?」

不意に、休憩をしていた四人のうちの一人、甲斐姫が口を開く。彼女が言う「これから」とは言うまでもなくこの後の四人の行動についてだ。豊臣が滅亡したことによって天下は徳川のもとに泰平となる。その事に関して雄介たちは別段、文句を言うつもりはない。そもそも、自分たちは友との誓いや義のために豊臣方に味方したが、家康も本心から泰平を望んでいることは解っている。しかし、豊臣方が滅亡したことによって雄介たちが行く場所はなくなった。幸村も『関ヶ原の戦い』の時は兄である信之、そして徳川家臣・本田忠勝の取り成しで命こそ助けられたが、今度捕まれば命はない。

「ふむ、だったら蝦夷（北海道）にでも渡って静かに暮らすか?」

甲斐姫の質問に雄介は苦笑いしながら答える。この時代、徳川の支配が行き届いているのは奥州までであり、蝦夷はまだ徳川の完全に支配下には入っていない。これ以上戦うことを望まない雄介たちからすれば徳川の影響が少ない蝦夷でのんびり隠居するのは悪くない考えだ。

「そうですね、ではまずどこかに身を隠して…傷を癒したら奥州へ、そこから蝦夷に渡りましょう」

どうやら幸村もそのことに異存はないらしい。一応、奥州には徳川に臣従している伊達政宗がいるのだが…政宗は雄介の数多い友人の一人であり、政宗自身の気性的にももはや戦うつもりもない雄介たちを家康に差し出すような人間ではない。

「そなたらもそれでよいか？」

幸村は視線をくのいちと甲斐姫に向ける。とはいっても、この二人…特にくのいちには幸村に好意を寄せていることを雄介も甲斐姫も知っている。気付いていないのは朴念仁の幸村本人ぐらいのものである。

「あたしは幸村様が行くところならどこまでもついていきます！」

普段はおちゃらけているところもあるが幸村に対しては非常に健気な少女である。こんな良い娘に想われていてそれに気付かない幸村も罪な男である。

「あたしも、いまさら離れる気なんてありません。どこまでも一緒ですよ」

一方の甲斐姫も雄介たちと共に蝦夷に渡る気満々であった。甲斐姫はくのいちのように特別幸村に好意を寄せているわけではない。

……まあ、甲斐姫はモテたいという願望があり、良い男には非常に弱いのだが…それはそうとして、絆を大切にする彼女としては仲間である雄介たちと供に行きたいという願いが強かった。

「よし、ではまずはどこかで疲れを癒して…」それは困りますね
っ！」

雄介の言葉を遮るように女性の声が聞こえてくる。その瞬間、その場にいた全員が武器に手を掛ける。

「遅いです」

ザシユー！

「がつ！？」

「幸村様！！」

悲鳴混じりのくのいちと甲斐姫の声が木霊する。幸村は背中を斬られ、その手に持っていた炎槍素戔嗚を手放して倒れた。

「っ！？お前は……」

雄介が幸村と襲撃者の間に入って七代伊坐那岐を構える。その間にくのいちと甲斐姫が幸村を抱き起す。幸村の背中に刻まれた傷はすぐに命を奪うようなものではないが、そのまま放置すれば危ないのは事実だ。

「…茜……！！」

茜と呼ばれた女性は妖しい笑みを浮かべながら雄介を見る。その手には赤と青、炎と氷の属性を持つ双剣『弐天伊坐那美』にてんいざなみが握られ

ている。兄妹であるこの二人が敵対する理由は簡単だった。単に兄の雄介は豊臣方、妹の茜は徳川方についただけの話だ。この辺は幸村も、自身の兄である信之が徳川方についているのでさして珍しいことではない。だが、敵対しながらも関ヶ原の時には幸村の助命をした信之と違い、雄介と茜の間に親しい空気はなかった。

ザッ！

さらにそこに雄介たちを囲むように十数名の兵士たちが現れる。恐らく雄介たちを討つために茜が連れてきた兵士たちだろう。徳川本陣にたつた四人で突撃した雄介たちには心身ともに非常に消耗しており、普段は気付けたはずの茜の接近に気付けなかったのだ。

「へへへ、茜様…本当に女たちは好きにしているんで？」

兵士たちは下卑た笑みを浮かべ、くのいちと甲斐姫を見る。二人ともその容姿は非常に優れており、情欲を向けるのに何の問題もなかった。雄介はそんな兵士たちの視線を遮るように二人の前に立つ。

「構わないわ。徳川に逆らった人間がどうなるうと問題ないもの」

兵士たちの問いかけに茜は冷淡に答える。その瞳は真っ直ぐに雄介を見据えていた。

「……家康公の命令…と言うわけではなさそうだな…」

その姿に雄介はこれは茜の独断だと結論付ける。落ち武者狩りと言うのは珍しいことではない。だが、兵士たちの言い方からするに

自分たちを狙っていたのだろう。初めから家康が自分たちを狙ったのだとすれば、兵士の数が少なすぎる。先の戦における徳川本陣への突撃を眼前で見ていた家康ならば、その慎重な気性からしていくら消耗しているとはいえ、雄介たち四人を討つのもつと兵を動員するはずだ。しかし、周りに茜たち以外の兵の気配は感じられない。

「そうです。家康様はすぐに追う必要はないと仰いましたが…騒乱の火種は消します」

茜の言葉を聞き、雄介の口元に僅かに笑みが零れる。その笑みに茜は顔を歪めた。

「……何かおかしいんですか？」

「ふっ、まるで官兵衛殿の言い草だな……だが、お前の場合は泰平のためと言うより…私怨だろ？」

雄介の言う官兵衛殿……それはかつて秀吉の軍師であり、秀吉の死後は徳川についた黒田官兵衛のことだ。彼は天下は一人の強い人間の意志が必要と考え、それ以外を火種として消そうとした男だ。彼は自らの情を一切捨てて天下を治める実力と意志の持ち主に仕えた。それが最初は織田信長、次に豊臣秀吉、そして最後に徳川家康だった。

しかし、彼と同じく信長や秀吉に仕えた雄介には茜のそれが官兵衛とは違うことに気付いていた。雄介はもともと、秀吉の家臣であった竹中半兵衛とは非常に親しい仲であり、その半兵衛が官兵衛と交流を持っていたことで必然的に官兵衛とも知り合っていた。だからこそわかるのだ。官兵衛は口では非情な物言いが多いがその実、情を意図的に排除している人間だった。一方で茜のそれは官兵衛の口調を真似ているだけにしか聞こえない。

「……………」

「凶星…か…………？」

雄介の問いかけに無言になる茜。その姿は無言の肯定にしか見えない。

「…………だからなんですか？どちらにせよ、あなたたちは徳川の世には必要ありません」

茜は両手の式天伊坐那美を構える。それと同時に周りの兵士たちも武器を雄介たちに向ける。

「…く……………！？」

くのいちが傷を負って倒れた幸村を抱き寄せ、甲斐姫は自身の武器を持って幸村たちを護るように構える。そんな二人に視線を向けず、雄介は口を開く。

「…二人とも…幸村を連れて逃げる……………」

「…！？」

突然の雄介の言葉にくのいちと甲斐姫は驚愕する。

「な、何言ってるのよ！？アンタを置いていけるわけ……………」

甲斐姫が雄介に食い下がる。しかし、雄介はその言葉を撤回しよ
うとはしない。

「いいから行け、このままじゃどのみち三人とも無事ではすまん」

「はあ……はあ……な……なりません……雄介殿……」

そこに傷を負った幸村が荒い息を吐きながら雄介を止めようとする。幸村にしてみれば、友である雄介を一人残していくことなどできるはずもなかった。

「……貴方は……私の……掛け替えのない友……貴方を残していくなど……」

幸村の顔色は非常に悪い。それでも、雄介を残していくことなどできないと地面に落ちた炎槍素戔嗚を取ろうとする。

「……幸村……俺を友と言ってくれるなら……生きる……俺を、友を護れなかった男にしてくれるな」

一瞬、悲しそうな表情を浮かべる雄介。その顔に、幸村たちは何も言えなくなってしまう。

「はっ！何ごちやごちや言っただよ！」

すると兵の一人が刀を振り上げて雄介に斬りかかるうとする。しかし……

ガァン！！

その瞬間に銃声が響き渡り、兵の身体が崩れ落ちる。そこには雄介が背中に背負っていた火縄銃を引き抜いて兵を射ち殺していた。

「…行け……」

その光景に僅かばかり、周りの兵が怯む。その間にくのいちが動き出した。

「…甲斐ちゃん……幸村様をお願い」

「…アンタ……」

くのいちが幸村を甲斐姫に担がせると自身の武器である二本の苦無『絶不知火』を構える。

「道は、私が開くから……ついてきて……」

それだけ言うところのいちが背後の兵に向かって駆け出す。

「おふざけはなし……滅!!」

ザシュ！ザシュ！

くのいちが絶不知火で一閃すると兵は致命傷ではないにもかかわらず一撃で絶命する。くのいちの絶不知火には二つの属性が付与されている。その属性は相手の防御を無視して攻撃できる『裂空』、そしてもう一つは一定の確率で敵兵を一撃で絶命させる『修羅』である。先程のはその『修羅』の属性が発動したのだ。そのままくの

いち は 走り だし、その後を幸村を担いだ甲斐姫が走り出した。

「ちょっと、いいの?」

走りながら、甲斐姫は先頭を走るくのいちに問いかける。甲斐姫にとつて、雄介は掛け替えのない仲間の一人だ。それを置いていくのは非常に辛い。

「…いいわけないよ…けど…あたしたちじゃ足手纏いにしかならない…それじゃあ意味ないよ…」

くのいちの眼から涙が零れ落ちる。くのいちとて、辛くないはずがない。幸村を経由してくのいちも雄介と親しい関係だった。その雄介が死ぬかもしれないのに辛くないはずがない。だが、疲労し、傷付いて満足に動けない幸村を庇いながらでは歴戦の勇士である雄介も満足に戦えない。涙を流しながらも、こうしなければ誰も生き残れないという考えと、いくら本人に言われたんだとしても、雄介を見捨てたという自責の念の狭間で必死に涙を拭いながら走るくのいち。くのいちと甲斐姫はひたすらに、雄介の無事を祈っていた。

その頃、雄介と茜たちの戦いは佳境に入っていた。

「ひ、ひい!？」

兵の一人が怯えた声を出す。それもそのはず、その場にはもはやその兵と茜、そして雄介の三人しかいなくなっていた。では他の兵たちはどうなったのか？その答えは非常に簡単である。なぜなら、雄介の足元に転がっているからだ。そのどれもが一切の息をしていない亡骸となっており、首を切り落とされたもの、背後から銃撃を喰らったものなど様々で、背後から銃撃を喰らったものは逃げるくのいちたちを追おうと雄介に背を向けた連中だ。

「……はあ……はあ……」

雄介は肩で息をしながら残った兵と茜を睨む。もしも万全の状態の雄介ならばたかだか十数名の雑兵と戦っても息切れなどしない。そもそも雄介は武の腕は彼の本田忠勝、前田慶次と並ぶほどの剛の者だ。しかし今の雄介は息切れしている。それはつい先ごろの大坂夏の陣での戦の疲労がそれだけ大きいということだ。

「あ、茜様……」

兵が怯えた視線を茜に向ける。その視線が助けを請うていること

は明白だった。その姿に茜は溜息を吐く。

「…仕方ないわね……」

そう言つと茜は兵の傍へと歩み寄る。助けてもらえる……兵はそんな淡い期待を抱くが……

ドン！

「…え……？」

茜は怯える兵を背後から雄介に向かって突き飛ばす。兵が突き飛ばされたことで一時的に茜の姿が雄介の視界から消える。

「くっ！」

ザシユ！

突き飛ばされた兵を雄介は一刀のもとに兵を切り伏せる。しかし、兵の背後に茜の姿はなく。

「甘いですね…兄上」

ザン！

不意に、横腹に激痛が走る。視線をそこに向けるとそこには式天伊坐那美の右の剣で雄介の横腹を切り裂いた茜の姿。茜は雄介の視界を一瞬封じた隙に横に周って雄介に攻撃を仕掛けたのだ。

「ぐっ！」

すぐに雄介は七代伊坐那岐で反撃しようとする。しかし、先の戦の疲労でもともと動きが大幅に鈍っている所に横腹に受けた傷も相まって速さで茜に劣ってしまう。

…カラン……

雄介が頭にかぶっていた兜が地面に落ちる。雄介の右肩には大きな切り傷ができていた。擦れ違いざまに茜に斬られ、その衝撃で兜が地に落ちたのだ。

「ぐ…あ……」

負った傷の深さ故か、それとも疲労故か、雄介が膝をつく。その肩に刻まれた傷は、素人目にも助からないことがわかるほどの深い傷だった。

「私の勝ちですね…兄上」

膝をついた雄介を嘲笑うかのように、茜が雄介を見下す。その眼には、本来肉親に向けられるであろう情愛は一切感じられない冷淡

な瞳であつた。

「ふふふ…あははは！ようやく勝ちました！あの兄上に！いつもい
つもいつも、私の先を行つた兄上に！！」

茜が狂つたように笑う。本来、茜の技量は雄介のそれに及ぶもの
ではなかつた。そこらの武将よりは遙かに強いが、本田忠勝、前田
慶次と並ぶ武勇を誇る雄介には及ばない。その彼女が雄介を打倒し
えたのは一重に、雄介が大坂夏の陣で多大に疲労していたからに他
ならない。如何に強大な武を持つと、たつた四人で数万からなる
精鋭が蠢く徳川本陣に突撃したのだ。その疲労は相当なものだろう。

「さて、あとは真田幸村を……」

びくっ……

雄介に背を向け、幸村たちを追おうとする茜。だが、その時僅か
に雄介の指が動いた。

ズシユー！！

「え？」

茜の腹部に鋭い痛みが走る。よく見ると自分の腹から、刃が飛び
出していた。そうしてようやく、茜は背後から刺されたのだと認識す
る。

「なん……で……?」

疑問に思いながら茜は振り返る。あの時、確かに雄介の右肩を切り裂いた。あの傷で右手に持っていた七代伊坐那美を振るうことなどできないはず……そう考えて振り返った茜の眼には……

「……最後の……最後で……詰めが……甘……かったな……」

左手で、地面に落ちていた幸村の愛槍・炎槍素戔嗚を茜に突き刺している雄介の姿があった。

「そん……な……あ……」

その姿に驚きながら、口から血を流して茜は俯せに倒れる。そして、もう二度と茜が目覚ますことはなかった。

「……はあ……」

ゆっくり息を吐き、雄介の両肩が脱力する。自分たちを追っていた敵は全て討った……これならば幸村たちは生き残れるだろうと、安堵する。

ガサツ……

不意に、すぐ傍の茂みから物音がする。力なく、その方向を向いた雄介が見たものは……黒い鎧に、三日月の前立てがあしらってある兜。そして右眼に眼帯を巻いた青年……雄介の友人の一人である伊

達政宗だった。

「政宗……何故……？」

雄介は政宗が何故ここにいいのか解らないと言った表情をしている。政宗も今回の大坂夏の陣に参加していた。それは解っているが、何故この場所に現れたのが雄介には解らなかった。その事を察したのか、政宗はムスツとした表情で雄介を見る。

「ふん、たまたま一人で月を眺めておつたら、銃声が聞こえた見に来ただけのことじゃ」

「そう……か……」

僅かに笑みを浮かべながら、雄介は政宗を見る。ここは戦があった場所から大分離れている。いくらなんでもそんな遠くまで銃声は聞こえない。大方、政宗も茜たちとは別の理由で自分たちを探していたのだろ。……と、結論付ける。もつとも、実際のところは政宗しか知りえないことだが……

「……逝くのか……？」

「……ああ……」

政宗の言葉に雄介が力なく頷く。もはやどう手当てしたところで、雄介の命は保たない。そのことは政宗も、雄介本人も解っている。

「政宗……最期に……頼みがある……」

「……なんじゃ……？」

「……幸村たちを……頼む……」

笑顔で、政宗に友のことを任せようとすする雄介。その笑みは、政宗がどうするかを解っているようだった。

「……ふん、馬鹿め……最期まで他人の心配か……」

呆れながら政宗は雄介に背を向ける。その背を、雄介はただ見つめる。

「……まあ良い、わしはこれから泰平の世の中身を作る。幸村ほどの才があれば、その助けになろう。ならば、幸村一人匿うなど訳ないわ」

本当は幸村一人ではないが……そんなことは政宗も解っているだろう。雄介は政宗の言葉に安堵する。

「……幸村たちのことはわしに任せるがいい……じゃから、お主は大人身しく成仏しておれ」

悲しみを帯びた政宗の言葉に、雄介はゆっくりと目を閉じる。

「……ああ……友を護り……友に看取られて逝く……悪く……ない……」

静かに、眠るようにその一生を乱世の中で駆け抜けた男は息を引き取った。

「……馬鹿めが……」

そして、政宗の隻眼からは……一粒の雫が零れ落ちた。

これにて序章は幕を閉じ、異なる世界にて、叢雲雄介と言つ男の
新たな物語が幕を開ける

序章……完

序章 散り逝く者（後書き）

というわけで序章完結です。ちなみにクロニクルの男主人公である雄介と女主人公の茜が兄妹という関係や性格はオリジナル設定です。

第一話 友との再会（前書き）

本編第一話です。ちなみに登場する無双キャラは戦国無双クロニクルのイベントで出したいと思ったキャラたちです。

もしよろしければ感想をお願いします。後書きも大したことを書いてませんがよろしければどうぞ。

第一話 友との再会

ぺちぺち

誰かが頬を叩く。その感触に、闇に沈んでいた雄介の意識が次第に覚醒し始める。

「……………い、お……………てってば……………」

雄介の耳に、ずっと昔に聞いたことがある声が木霊し、少しずつ瞼が開いていく。

(この声は……………俺は地獄にでも来たのか?)

その声は非常に懐かしくて、そしてもう聞くはずのなかった声。

「お〜い、起きてってば〜」

「半…兵衛……………?」

「あ、やっと起きた。おはよ」

雄介に笑顔を向けるのは、白い帽子を被った幼い顔の青年。かつて、雄介が信長に仕えていた頃の友・竹中半兵衛の姿がそこにはあった。

「…半兵衛？…ここは、地獄か？」

頭に疑問符を浮かべて半兵衛の顔を見る。半兵衛はすでに四十年近く前に病で世を去ったはずだ。なのに、目の前には半兵衛がなくなるよりもさらに数年前の、稲葉山城で初めて会った頃の姿の半兵衛がいた。

「うーん、多分違うと思うよ？俺もどこだかわかんないんだけどさ」

そう言われて雄介が起き上がり、辺りを見回す。周りは森の中だというのは確かだが、少なくとも雄介が最期に見た景色とは違う。何故なら、自分が討った兵や茜の姿はどこにもない。しかも身体には一切の疲労感はなく、茜につけられたはずの傷もない。疲労の方は寝ていたことで回復していたにしても傷がないのは説明がつかない。それどころか自身が纏っている甲冑には自分の血の跡どころか返り血すらも見当たらない。もとの純白の甲冑だった。すぐ傍には茜に弾き飛ばされたはずの兜も置かれている。

「ここは……いったい……身体が！？」

さらに雄介はもう一つ変化しているものがあることに気付く。それは自身の身体が若返っていることだった。今の自分の身体は数十年前、まだ武者修行をしていた頃の十八歳の身体だった。

「俺は……いったい…？」

一応、自分の武器である七代伊坐那岐や銃はそのまま自分の傍に置かれている。それどころか茜との戦いで決め手となった幸村の愛槍・炎槍素戔鳴も雄介の傍らに置いてあった。

「ぶるるっ」

「うわ!?!」

さらに、半兵衛とは逆隣りから生暖かいものが頬を触る。雄介がその方向に顔を向けるとそこには真つ白な毛並みの馬がいた。どうやらこの馬が雄介の頬を舐めたらしい。

「…白雲しろくも……か？」

「ぶるっ」

まるで雄介の言葉に頷くように馬…白雲は頷く。この白雲と言う馬はかつて、雄介が信長に仕えていた頃に、戦場で功を立てた雄介に信長から与えられた名馬だ。それ以来、雄介と白雲は白雲が死ぬその日まで共に戦場を駆け抜けた掛け替えのない戦友だった。

「あ、気が付かれたんですね!?!」

白雲の毛並みを撫でているともう一つ、半兵衛とは別に懐かしい声が聞こえる。声がした方向に視線を向けるとそこには背に自身の身長ほどもある大太刀を背負った少年。半兵衛と同じように、数十年前に病死したはずの森蘭丸の姿があった。

「…蘭…丸……?」

「はい!気が付かれて何よりです、雄介様」

そう言いながら蘭丸は雄介に眩いばかりの笑顔を向ける。その手には猪が持たれている。恐らくは食事のために狩りに言っていたの

だろう。

「何故、お前たちが……」

もはや雄介の頭は混乱の極致であった。死んだと思っていた人間が実は落ち延びて生きている……と言うのならまだしも、半兵衛と蘭丸は間違いなく死んだ。何故そう言いきれるかと聞かれれば、その答えは実に単純である。なにせ、この二人の死を看取ったのが他ならない雄介だからだ。さらに自身の愛馬であった白雲も大坂の役が始まる数年前に老衰で世を去っているはずであった。

そこまで来て、半兵衛と蘭丸は食事をしながら自分に起こった出来事を話し始めた。結果的に言うと、二人とも自分が死んだときの記憶はしっかりあった。自分が死ぬ間際に、意識が闇に沈んでいくのを実感し、そして次に目が覚めるとこの場所で寝ていたというのだ。それも雄介ほどではないにしろ、死んだときよりも肉体年齢が若返った状態だ。

その時はまずはじめに半兵衛が目覚め、その隣には雄介や蘭丸を含む三人が寝ていたらしい。次いで蘭丸が目覚め、その次に三人目が目覚めて最後に雄介が目覚めたとのことだ。雄介と三人目が目覚めるまでの間、半兵衛は蘭丸から蘭丸自身が死ぬまでの日本の出来事を聞いた。本能寺で信長が明智光秀の謀反によって死んだこと、山崎の戦いで秀吉が光秀を討ったこと。もつとも、蘭丸が病死したのも山崎の戦いからすぐのことだったので知っていることはそんなに多くはなかった。ちなみに三人目に話を聞こうとしたら雄介に聞いた方が手っ取り早いと言っていたらしい。

そこまで聞いた雄介は、今度は自分が知る、豊臣秀吉による天下統一と秀吉没後の家康の台頭の顛末を話した。秀吉の死後、家康が台頭し、加藤清正、福島正則は豊臣の家を護るために家康に臣従した。対する石田三成はあくまでも豊臣の天下を護るために家康と対立したこと。友である三成を護るために雄介も三成に味方した

こと。結果、三成は関ヶ原で敗れ、六条河原で斬首。天下は家康のものとなり、二度に渡る大坂の役と豊臣家の滅亡と言う結末。

「…そっか……」

それを聞いていた半兵衛はどこか悲しそうな、そしてどこか納得したような表情をしていた。半兵衛にとって、秀吉は自身が心から仕えたいと思う主君だった。何せ彼は信長の世よりも秀吉の世を望んでいたのだから。だからこそ、秀吉が天下を統一できたのは嬉しかったが、結局豊臣家が滅んでしまったことにはどこか寂しさを感じたのだろう。

「やっぱさ、官兵衛殿は家康方についたんでしょ？」

その問いかけに雄介は頷く。もともと、官兵衛は天下を統べる実力者に仕えていただけであり、その器がなければすぐに見限る人間だ。だが、半兵衛もそれを知っているし、官兵衛が一刻も早く泰平を得るためにそうしていたことは雄介にも解っているので今更どうこう言つつもりはなかった。

「あ、そう言えばこれって雄介きみの？」

これまでのことを話していると、不意に半兵衛が何か荷物が入った袋を見せる。なんでも白雲のすぐ傍に置いてあったらしい。

「これは……」

それを見て雄介は肯定の意を示す。この袋は雄介が関ヶ原の戦い以降、各地を放浪しているときに持っていたものであり、戦火を免れさせるためにとある寺の住職に預けておいたものだった。

「……………」

半兵衛から渡された荷物の中身を雄介は確認する。そこに入っているのは住職に使って欲しいと渡した金とたった一つの、雄介にとっては何よりも大切なものが入った小箱だった。中に入っていた金が減っていないところを見るとどうやら住職はこの金を使っていなかったらしい。この荷物を預けたのは関ヶ原のすぐ後なので住職はゆうに十五年はこの金を使わなかったらしい。

「しかし、ここはいつたいどこなのでしょう？」

不意に、蘭丸がそんな疑問を口にする。さて、ここで何故蘭丸が山崎の戦いまで生きていたのかを説明しておこう。本来、正史では本能寺にて信長と共に死亡するはずだった森蘭丸。その運命を変えたのは紛れもない雄介であった。本能寺にも雄介は信長の護衛として同行していたのだ。しかし、多勢に無勢、さらには雄介の死を望まなかった信長の言葉により雄介は本能寺を脱出した。その際に本能寺で倒れ伏している蘭丸を発見したのだ。

蘭丸は本能寺で信長が果てたことを知ると自身が信長に依存し、墮生に生きていたこと悟った。偽りの希望に縋っているだけで、自らの足では歩いていかなかったことを、皮肉にも蘭丸は信長を失ったことで悟ったのだ。

結果、満身創痍ながらも自らの足で生きることを決めた蘭丸は雄介と共に本能寺から脱出。雄介はその後、山崎に進撃してきた秀吉と合流した。一方の蘭丸は本能寺の怪我がもとで山崎の戦いからしばらくして病没したのだ。

「うーん、まあある程度予測はついてるんだけどね」

そんな蘭丸の疑問に半兵衛が軽い感じで答える。

「…それは……… いったい？」

半兵衛の言葉に蘭丸が尋ねようとす。すると、まるで初めからそこにいたかのように一人の男性が姿を現した。

「今、戻ったぞ………」

その声を聞き、雄介の顔は再び驚愕に染まる。そこにいたのはおおよそ通常の間人とは違う顔色に、鍛え上げられた肉体を持つ長身で赤い髪をした男性。かつて、北条に属した関東一の忍び『風魔小太郎』がそこにいた。

「あ、小太郎さん、おつかえりー！」

半兵衛が小太郎に対して手を振る。

「ふっ、うぬも気が付いたか………」

小太郎は目が覚めている雄介を見て不敵な笑みを浮かべる。

「…お前……… 死んだのか？」

雄介の驚きはその一言に集約されていた。雄介にとっては小太郎も親しい人物の一人だった。かつて、秀吉の小田原征伐で敵対し、その後はまるで姿を見なくなっていたので懐かしさもひとしおだ。

「くくく、我が死んだのがそんなに可笑しいか？」

雄介の反応を見て実に愉快そうに小太郎が笑う。確かに普通に考えれば、人間死ぬのは可笑しくない。可笑しくないのだが、どうにも雄介にはこの小太郎と言う人物が死ぬというのが想像できなかつた。戦死は勿論、老衰で死んだところを想像しても違和感しかない。

「まあ、良い……この場所のことは調べて来たぞ」

「わゝ、さつすが小太郎さん仕事が速いな」

実にワザとらしい台詞だが、半兵衛は常時こんなものである。実は蘭丸の次に目覚めた小太郎は半兵衛に頼まれ、この付近の偵察に出でいたらしい。

「だが、面白いことが分かったぞ。この地は大陸の涼州、現在の国の名は『漢』だ」

相変わらず小太郎は楽しげである。もともと、この男には見知らぬ土地に来たとしても不安感など皆無なのだろう。そもそも、雄介は小太郎ならどんな場所に来ても生きていけると思っている。

「……漢……と言うと確か、大陸の……」

蘭丸が小太郎の言葉を聞いて首を傾げる。その顔は明らかに混乱している。勿論、雄介も同様だ。漢と言えば中国大陸……雄介たちの居た時代ではまだ中国ではないが……の国の名前の一つである。しかし、雄介たちの居た世界ではとうの昔に漢は滅んでおり、国名は明となっている。

「……なるほどね……ちなみに小太郎さん、『前漢』と『後漢』のどつちだかわかる？」

顎に手を当て、考え事をしながらも半兵衛は小太郎に尋ねる。

「我が見てきた中では、恐らく後漢であろう。ここに戻る間際、黄巾と戦う軍勢を見たからな」

「……はっ!?」

小太郎の言葉に三人は驚いた。後漢で黄巾と言えば半兵衛の頭の中には『黄巾賊』しか思い浮かばない。その黄巾賊と戦う軍勢……それが官軍か義勇軍かはわからないが、とにかく小太郎は特別何でもないように答えたのだ。まあ、小太郎が進んで人助けをするというのも想像がつかないが。

「ちよつ、小太郎さん!もつと早く言つてよ!」

さすがの半兵衛も慌てている。如何に戦国一の名軍師とはいえ、これは流石に予想外すぎた。

「とにかく急ごう!俺の考えは行きながら話すよ!」

「ああ……」

「わかりました!」

半兵衛の言葉に雄介と蘭丸は頷き、小太郎はやはり笑いながら見ている。小太郎はとにかく、他の三人は賊徒が暴れているの見過ごせる人間ではない。蘭丸は生来、真面目な気質であるし、雄介は幸村や兼続、三成と義の誓いを交わした仲だ。半兵衛も民のことを思いやる人物である。

「まったく、お前は相変わらずだ。ある意味安心した」

小太郎と最も付き合いが長い雄介は文句を言いながら愛馬の白雲を走らせる。現在、小太郎の先導のもとで雄介は白雲に乗り、後ろに蘭丸を乗せて走っていた。この白雲と言う馬は基本的に雄介以外乗せないが雄介が許した場合のみ、主人以外を乗せるといふ非常にできた馬である。

「で、半兵衛。さっき言ってたお前の考えはなんだ？」

雄介は白雲の手綱を操りながら上空の半兵衛に顔を向ける。半兵衛は自身の武器である羅針盤を回転させ、まるで現代で言うヘリコプターのようにして飛んでいた。もつとも、これは年齢の割に身体が小さい半兵衛だからこそできることで、雄介では間違いなく飛べない。

「ん〜？俺の考えてるのはね、ここが俺たちがいた世界とは別の世界なんじゃないかってこと。まあ、俺たちはみんな死んだときの記憶があるわけだしさ、そうじゃないかなと思って」

確かに半兵衛の言うことも解る。四人と一頭は全員、死んだときの記憶も、自分が死のうとしているときの感覚も覚えている。そんな状況では普段なら信じないような話も信じることができる。

「しかし、後漢の時代と言うのは……」

「……ん〜、だからもしかしたら別の世界ってより、俺たちが時代を遡った可能性も有るんだけどね」

さすが軍師、実に柔軟な思考である。もつとも、軍師の中でも半兵衛のような発想ができるものはそうそういないと思うが。

「……そこだ……」

小太郎が立ち止るとそこで森は終わっており、雄介たちが立っているのは少しばかり高い丘の上となっている。そしてその丘の下では二つの軍勢が戦っていた。一方は頭に黄色い布を巻き、『蒼天已死黄天祇立』と書かれた旗を掲げている。十中八九、黄巾賊だろう。もう一方は『馬』と書かれた旗を掲げる軍勢。『馬』の旗を掲げる軍勢を指揮しているのは茶色い髪をポニーテールにした少女と、その少女を小さくしたようなサイドポニーの少女だった。

「あちゃあ……あつちの軍、拙いかな？」

半兵衛が呟く。現在の両軍の状況は黄巾賊が優勢であった。それと言つのも黄巾賊はもう一方の軍勢に比べて明らかに数が多い。それに加えて黄巾の指揮官は恐らくもともと軍人か何かだったのだろう、通常の賊に比べて指揮能力が高い。

一方の官軍が義勇軍……義の旗を掲げていないので官軍だろう……は将であろう少女たちも武の腕は一流、率いている兵士たちも精鋭なのだろう。だが、いかんせん数の差と黄巾の指揮官の指揮能力が高いこともあって苦戦しているようだ。しかも将である二人の少女たちは数の多さに分断されている。少女たちの個々の武勇は非常に高いのでしばらくは保つだろうがじきに疲れで動けなくなる。そうなれば討たれるか捕らわれるか……少女たちは武勇だけでなく容姿も優れている。捕らわれたとしても碌な目に合わないだろう。

「半兵衛と蘭丸はあちらの小さいほうの少女を頼む。俺はあつちを……小太郎……」

雄介が小太郎の方を向くと小太郎は雄介の意図を理解したのか、笑いながら消えていく。そして蘭丸は半兵衛と共に、雄介は兜の緒を締め直し、白雲を走らせた。

「くそっ！こいつら！！」

少女は次々に群がってくる黄巾賊を自身の持つ十文字槍『銀閃』ぎんせんで叩き斬る。少女は名を『馬超』ばちゆう、西涼の雄『馬騰』ばていの娘であり、『錦马超』と渾名されるほどの猛将である。彼女は今回の黄巾賊討伐の指揮官である。本来なら母である馬騰が指揮をする予定だったが、最近になって異民族である羌族の動きが活発となっており、その対応に向かい、今回の戦の指揮を馬超が、副将を彼女の従兄弟

に当たるもう一人の少女『馬岱』が務めることとなった。

(数が多すぎる…このままじゃ)

馬超は内心で焦っていた。最近になって頭に黄色い布を巻いた『黄巾賊』と呼ばれる賊が大陸各地で暴れ始めていた。今回の戦も西涼方面に現れた黄巾賊を討伐するのが狙いだったが、ここで馬超にとっていくつもの誤算があった。

まずはこの時期に羌族が動き、馬騰を含む多数の兵がそちらに対応しなければならなかったこと。もう一つは黄巾賊の数が報告よりも多かったこととその指揮官の指揮能力が高かったことだ。

「おら死ねや!!」

「一人でかかるな!」

仲間がやられても次々に馬超に向かってくる兵士たち。あまりの数の多さに西涼自慢の騎馬兵も足を止められ、苦戦を強いられる。

「11の!」

さらに一人、馬上から馬超の銀閃に斬られて倒れる。

「お姉様!危ない!!」

すると後方から馬岱の声が聞こえる。振り向くと黄巾賊の兵の一人が馬超に向かって槍を突き出している。

ギャリン!!

「ぐっ!?!」

その攻撃に反応し、馬超は銀閃で防ぐ。だが、無茶な体勢で受け
たためか馬の上から落とされる。

「今だ!ぶっ殺せ!」

(ちくしょう、こんなところで!)

倒れこんだ馬超に黄巾の兵士たちは槍で馬超を刺し殺そうとする。
突き出された槍に馬超は思わず目を瞑る。

「お姉さまああああああ!?!」

辺りに馬岱の叫びが木霊する。だが、黄巾の槍が馬超を貫くこと
はなかった。

ガンガンガン!!!

「え?」

馬超が馬岱の叫びの後に聞いたのは聞いたこともないけたたましい
炸裂音だった。目を開けると自分に槍を向けていた兵士たちが倒
れ、周りの黄巾の兵士たちも別の方向を見ている。すると、馬超の
頭上を巨大な影が覆った。

「どけ」

ただ一言、その一言と共に馬超の前に巨大な影が舞い降りた。その姿に馬超は目を奪われる。美しいほどに純白な馬と、それと同じく白を基調とした甲冑に身を包んだ姿。身に着けた兜にはまるで太陽をあしらった家紋『太陽紋』が刻まれている。

その右手には友・真田幸村の愛槍である炎槍素戔嗚を握り、左手には連射可能な火縄銃を持っている。そして背中には身の丈ほどもありそうな大太刀・七代伊坐那岐を背負い、かつて、戦国の世を強靱な意志を持って駆け抜けた叢雲雄介は、再び戦乱の時代に降り立った。

第一話 友との再会（後書き）

第一話でした。ちなみに蘭丸については実際に戦国無双クロニクルであったイベントに若干オリジナル設定を付け加えました。

愛馬の白雲に関してはクロニクルに登場する馬にオリジナル設定をつけたものです。

キャラ設定(前書き)

今回はちょっとした主人公の設定です。

キャラ設定

名前：叢雲むらくも 雄介ゆうすけ

年齢：18歳（あくまで身体年齢）

容姿：戦国無双クロニクルの主人公。白が主体で所々黒、家紋が金色で描かれた甲冑を着ていて、兜をかぶっている。家紋は太陽を象った『太陽紋』。

武器：七代伊坐那岐しちだいいざな岐

戦国無双クロニクルの主人公のユニーク武器。身の丈ほどもある大太刀。また、それと同時に多少連射能力のある火縄銃。大太刀は背中に右向きに背負い、火縄銃は左向きに背負っている。武器自体に雷と炎の属性が宿っている。

炎槍素戔嗚えんそうすまのお

通常のものよりも刃の部分が巨大な十字槍。真田幸村のユニーク武器。先述の通り、本来は真田幸村の武器だが最後の茜との戦いで幸村から借りて使用したためにそのまま恋姫世界に持って来てしまった。武器自体に炎と雷の属性が宿っている。

詳細：戦国無双クロニクルの主人公。大坂夏の陣での最後の突撃後、幸村たちと共に戦場を離れようとしていたところを妹・茜に襲撃され、幸村たちを逃がした後に1人奮戦するも相討ちとなったはずが、気が付いたら恋姫世界に若返った形でやってきていた。

北条氏康の河越夜戦から大坂夏の陣までを第一線で戦い抜いた歴戦の猛将。多くの武将と出会い、多くのものを学んだため、知勇共

に秀でている。武勇の腕は本多忠勝や前田慶次と互角、或いはそれ以上。

実際は河越夜戦から大坂夏の陣まで相当な年数があるがその辺は戦国無双なので気にしてはいけない。

名前：白雲しらくも

詳細：純白の毛並みを持つ雄介の愛馬。かつて、雄介が信長に仕えていた頃に戦の褒美として信長から与えられた。相当の名馬であり、前田慶次の愛馬『松風』には及ばないものの『松風』を除けば走る速さでは随一。

主人には非常に従順だがその一方で主人の頼みがなければ他の人間は絶対に乗せない。頼まれなくても乗せるのは雄介の前の持ち主だった信長ぐらい。

数多くの戦を雄介と共に生き抜いたが、関ヶ原の戦いの数年後に寿命で死亡した。恋姫世界にも来ており、雄介との再会し、再び共に戦場を走れることを非常に喜んでいる。

第二話 西涼軍救出戦（前書き）

更新です。とりあえず はこのまま固定の予定です。

もしよろしければ感想よろしくお願いします。

第二話 西涼軍救出戦

その光景に、馬超は目を見開いている。自分を助けたのは純白の白馬に跨り、白い甲冑に身を包んだ男。背中には大太刀を、右手には形状こそ自分のものと似ているが、刃の部分が明らかに巨大な十文字槍を、そして左手には煙を吐き出している見たこともない武器を持っている。顔は立ち位置や兜の陰になっっていて見えないが、兜に付いている太陽のような形の金色の前立てが日の光にさらされて美しく輝いている。

「お、お前… いったい……？」

馬上の雄介を見上げていた馬超が不意に疑問を口にする。しかし、雄介はそれに答えず、左手の馬超が見たこともない得物…… 火縄銃を眼前の敵に向けた。

ガンガンガンガン！！

「うわ！？」

再び、火縄銃が火を噴く。それは寸分違わずに眼前の黄巾兵を撃ち抜き、絶命させていく。その光景を見ていた馬超はまたしても驚きに目を見開く。いきなり物凄い音がしたと思ったら目の前の敵が倒れて行ったのだ。鉄砲の存在を知らない馬超からすれば驚愕するのも無理はない。そして、それは雄介たちの周りにいる黄巾賊も同じだった。見たこともない武器で、轟音が鳴ったと思ったら次々に仲間が倒れていく。その未知の恐怖は黄巾兵たちの足を止めるには

十分だった。

「ぶるる……」

すると、黄巾兵の足が止まった隙に一頭の馬が馬超に擦り寄ってくる。その馬は先程、馬超を乗せていた馬だ。

「あ、黄鵬……」

擦り寄ってきた黄鵬と言う馬に、馬超はようやく我に返る。どうやら、黄鵬は自分を心配してくれていたらしい。

「良い馬だな……」

不意に、それを横目で見ていた雄介が声をかける。

「火縄銃こじつの音を聞いても逃げない…主人想いの良い馬だ」

それは雄介の偽りのない称賛だった。そもそも、馬と言う生き物は元来、非常に臆病だ。特に突然大きな物音が上がったらびっくりしてパニックになるものもある。しかもこの時代には本来存在しないはずの火縄銃の轟音を聞いてもパニックにならずに主人に寄っていった黄鵬に雄介は正直に驚いた。

「え、あ、えつと……ありがとう……」

いきなり黄鵬を褒められ、馬超はドギマギしながらも雄介に礼を言う。この黄鵬と言う馬は馬超にとっては家族同然の馬なのだ。その黄鵬を褒められて馬超は内心で嬉しかったのだ。

「…さて……」

雄介は何を思ったのか白雲を降り、右手の炎槍素戔嗚を背中の七代伊坐那岐の鞘の隙間に入れ、火縄銃を背中に背負う。そして、自分本来の武器である大太刀・七代伊坐那岐を引き抜いた。七代伊坐那岐は青白く、美しい輝きを放ち、雄介の手に握られる。そもそも、炎槍素戔嗚は本来、幸村の武器である。雄介も槍は使えないことはないがやはり七代伊坐那岐を使った方が楽だった。

「死にたい奴はかかってこい！」

雄介の咆哮に黄巾兵たちは先程の火縄銃の恐怖をまだ拭えないながらも、相手は一人だと思いなおして雄介に向かう。

「ひ、一人でなにができる！やっちまえ！」

黄巾兵たちは武器を構えて雄介に斬りかかる。しかし、雄介はそれよりも速く七代伊坐那岐を振るい、黄巾兵を切り捨てる。

「はあ！」

シユオ！

しかも、雄介が刀を振るった直後、雄介の周りにカマイタチが発生する。それによってさらに雄介に斬りかかるうとして黄巾兵たちが切り裂かれる。

「な、なんだあ！？」

刃に触れてもいないのに仲間が斬られたことに黄巾兵たちは動揺する。さらに……

バリバリ！ボオ！

雄介が七代伊坐那岐を振るって敵を斬るごとに雷や炎が発生して黄巾兵に被害を及ぼしていく。雷を纏った攻撃を喰らえば、たとえそれが掠り傷程度でも身体が痺れ、炎を纏った攻撃は言うまでもなく相手を燃やす。そんな、本来ならあり得ない光景に黄巾兵たちの動揺はピークに達した。

「よ、妖術師だ！」

「こ、こんな奴に勝てるはずねえ！逃げろ！」

次々に雄介の姿に恐れをなして逃げていく。そもそも、これらは雄介の武器・七代伊坐那岐に付与された属性攻撃であり、七代伊坐那岐はその刀身に炎と雷の二つの属性を持っているのだ。

「……はっ！アタシたちも行くぞ黄鵬！」

しばらくその光景に呆然としていた馬超だが、ようやく我に返り、銀閃を片手に再び奮戦を始めた。

少し時間を戻し、こちらは馬岱側。馬岱は安堵していた。姉と慕う馬超が危うく黄巾兵に討たれそうなことに悲鳴を上げてしまったが、雄介の介入によってそれは防がれた。馬岱からすれば素性のしれない相手だが、馬超を助けてくれた以上、敵ではないと考えたの
だろう。

「貰ったあ!!」

「っ!?!この!」

僅かに馬超の方に気を取られていたため、僅かに隙ができてしま
う。その隙を突こうと黄巾兵が槍を馬岱に突きだす。不意を突かれ
たためか、それを無傷で防げる可能性は五分五分。馬岱は必死にそ
の攻撃を防ごうとする。

シュバ!

「ぐわっ!?!」

だが、次の瞬間目の前に迫っていた黄巾兵が吹き飛ばされた。い
や、それだけではない。自分を中心に円を描くように黄巾兵が薙ぎ
払われていく。

「あらよつと！」

そんな声が頭上から聞こえ、馬岱が声のした方を向こうとするとすぐに小さな人影が馬岱の前に降り立った。

「駄目だよ、戦場でよそ見しちゃ」

馬岱に笑顔を向け、半兵衛が微笑む。

「っ！この餓鬼が！！」

「あ、危ない！」

そんな半兵衛に数名の黄巾兵が斬りかかる。馬岱は半兵衛を心配して声を掛けるが、その攻撃を半兵衛は空中に飛び上がって避けた。

「馬鹿め！空中じゃ動けねえだろ！」

降りてくる半兵衛を狙おうと、黄巾兵たちが待ち構える。だが、『空中で動きがとれない』と言つのは半兵衛には当てはまらない。

ヒュンヒュンヒュン

「ふふ〜ん、甘いね」

鼻歌交じりに半兵衛は黄巾兵たちを見下ろす。何のことはない、半兵衛はここに来る時と同じく自身の武器である羅針盤・『十二方じふにほう八将針はっしょうしん』の刃を回転させてヘリコプターの要領で宙に浮いている。

ちなみにこの武器は腕に装着して振るう他、ヨーヨーの要領で振り回すことができ、羅針盤の中には回転する刃が仕込まれているのである。

「と、飛んでる……」

その光景に馬岱は声を失う。誰かに吹っ飛ばされると言うのならとにかく、自ら人間が空を飛ぶなど彼女には考えられなかった。黄巾兵たちも同じようで、呆然と半兵衛を見ている。

「あ、そこにいると危ないよ？もう遅いけど」

「へ？」

半兵衛の言葉に黄巾兵たちは疑問符を浮かべる。そしてそれが彼らの最期の言葉となった。

ズシャアアア！！

「「「ぎゃあああああ！！！！」「」「」

黄巾兵たちの断末魔の音が響き渡る。彼らは横から来た衝撃波によつて一斉に薙ぎ払われた。馬岱が攻撃が来た方向を見ると、そこには一人の女性と見紛うほどの美貌を持った少年が身の丈ほどもある大太刀を構えていた。

「蘭丸さんカツコいい〜」

半兵衛が蘭丸を見て称賛の声を送る。蘭丸は自身の武器である大太刀・神剣カムドを構えながら馬岱を護るようにして立つ。

「お怪我はありませんか？」

「あ、うん！蒲公英は平気……」

「じゃあもうちょっと頑張ろうか？多分もうすぐこの戦終わるし」

半兵衛が空から降りてきて十二方八将針を構える。馬岱は半兵衛の言葉に疑問を浮かべながら、再び自身の武器の片刃槍・影閃を構える。そしてこれからはらしくして、半兵衛の言葉は現実のものになった。

「くそ！何をしてる！？ただか三人加わったぐらいで！」

その頃、黄巾兵の指揮官は混乱していた。先程までは有利に進めていたはずの戦況がたった三人の乱入者によってひっくり返され始

めたのだ。雄介が持つ火縄銃と言つ見たこともない武器に加え、彼らの持つ武器が宿す属性による攻撃。それは所詮、賊の寄せ集めでしかなかった黄巾兵たちに恐怖を与え、逃走する者が続出した。

「ちくしょう…こんなところで……!?」

この黄巾兵の指揮官は元々、官軍の将であつた。賊の討伐などで経験を積んでいた、能力だけを見ればそれなりに有能な指揮官である。しかし、人物面で言えば下種の一言に尽きる男であつた。賊の討伐に赴けばその報酬と言わんばかりに近隣の村の娘を献上させたり、金をせびつたりする…ある程度能力がある分、非常に厄介な人物であつた。だが、それらの悪業が官軍の良識的な將軍に露見し、罷免されたのである。結果、職を失つて賊に身をやつし、過去の経験を活かして黄巾賊の指揮官となつたのである。

「ひ、ひいいいい!!」

「あ、おい逃げるな!戦え!!」

眼前で繰り広げられる雄介、半兵衛、蘭丸の奮闘によって崩れ始めた黄巾賊に息を吹き返した馬超率いる涼州の軍勢。その姿に男の傍にいた黄巾兵たちも腰を抜き、逃げ始める。指揮官がそれなりに有能だとはいえ、官軍ほど統率がとれているわけではない。ここにいる黄巾兵は志など持たず、ただ単に賊として好き勝手したいだけの人間の集まりである。自分たちが不安になったり、恐怖に駆られれば簡単に逃げ出すように人間たちであつた。

「くくく……」

不意に、男の背後に不気味な笑い声が木霊する。男がそこに目を

向けると、長身に鍛え抜かれた体軀の男、小太郎が立っていた。

「ひっ！」

小太郎の容姿は通常の人間と違って肌の色は青白く、髪の色は赤。その異形に指揮官の男は恐れおののく。

「くくくく…我が恐ろしいか？」

「な、なんだ teme ！？」

男の反応を見て小太郎は実に愉快そうに笑う。

「我は風魔…混沌に吹きすさぶ風」

冷笑を浮かべながら小太郎は男に近付く。小太郎は男にとって、言わば死神。その死神がユックリと男に歩み寄る。

「く、来るんじゃない！」

恐怖のままに男は後ずさりする。腰に差していた剣を抜き、震えながら小太郎に向ける。

「くくく、どうした？逃げるならばそちらでは意味がないぞ？」

小太郎の言う通り、男が後ずさりしようとしている方向は雄介たちが暴れている方向だ。その方向に逃げても待っているのが死であることに変わりはない。

「ち、ちくしょう……そこを退け！！」

そのことを自覚したのか、男は意を決して小太郎に斬りかかる。その剣は何物にも遮られることなく振り降ろされ……

ガギン！

「へ？」

地面に叩きつけられた。

「や、野郎何処に……」

確かに小太郎に向かって振り降ろされたはずの剣。しかしそこには小太郎の姿はない。慌てて男は小太郎の姿を探す。

「くく……どうした？我は此処だ」

背後から小太郎の声が響く。

「ひ！？……この化け物が……」

突然背後から聞こえた声に男はさらなる恐怖に駆られ、剣を振るう。しかし、その剣はまたも目標に当たらず空を切る。

「くく……案ずるな、今その恐怖から解放してやろう」

小太郎は今度は少しだけ離れた場所に現れる。そしてそこから自身の腕を伸ばした。

「な……があ！」

腕が伸びた。男はその光景に驚き、小太郎の腕は男の首を掴む。首を掴まれた衝撃で男は剣を離してしまい、その後の運命はもはや逃れられぬものとなっていた。

「ぐ……が……が……があ………」

小太郎は男の首を掴むと、自分のもとへと腕を引き戻し、そのまま男の首を絞めながら持ち上げる。

「あ……が……た……たす………」

自身の首を絞めている小太郎の腕を握り、必死に命乞いをする男。だが、首を絞める腕の力は一切弱まることはなく、そして……

ゴキリ！

小太郎の腕は容赦なく、男の首の骨を粉碎した。

「敵将、混沌に帰した……」

「ひ！お頭がやられた！？」

「も、もう駄目だ！逃げろおおおおお！！」

男が討たれた光景を見ていた黄巾兵たちが大声を上げ、それは瞬

く間に全軍へと伝染していく。

「よっしゃあ！追撃だ！逃がすな！」

それを好機と馬超の指示が飛び、西涼の騎馬兵たちは逃げ始めた。黄巾兵に向かって突撃していく。こうしてこの戦いは雄介たちの助太刀によって西涼軍の勝利に終わった。

「ふゝ、なんとか終わったね」

「ええ、皆さん無事で良かったです」

戦が集結し、雄介、半兵衛、蘭丸が一ヶ所に集まる。ちなみに雄

介は西涼軍が追撃をかけている間に白雲を走らせて森の出口に置いておいた荷物を持って来ていた。

「さて、これからどうするか……」

「お〜い！」

雄介がそう口にしようとした時、少し離れた場所から馬の蹄の音と共に二人の少女がやって来た。言うまでもなく、先程助けた馬超と馬岱である。彼女たちは三人の目の前に来ると馬を下りた。

「さっきはありがとな、おかげで助かった」

「ホントだよ、あんなに在るなんて聞いてなかったもんね」

馬超と馬岱は戦で助けられたことに礼を言い、頭を下げる。

「気にするな。俺たちが好きでやったことだ」

「はい、民を苦しめる賊を見逃すことなどできません」

雄介、蘭丸の順で答える。

「それでもだ。あなたたちが来てくんなかったら、アタシらはやられてた」

馬超は少しだけ悔しそうな顔になる。どうやら今回の戦で賊にやられそうになったことを不甲斐なく感じているらしい。それを見た雄介は不意に馬超に近付き、頭を撫でる。

「うえ!?!」

いきなりの感触に馬超は驚きの声を上げる。だが雄介に止める気配はない。

「そう落ち込むな。勝敗は兵家の常、この戦を教訓にすればいい」

「あ…うん……」

優しい声音で馬超に言い聞かせる雄介。慰められた馬超は顔を赤くしながらも頷いた。

「お二人さ〜ん、良い雰囲気のところいいかな〜?」

すると半兵衛が二人に声をかける。

「!?!」

「?」

それに驚いた馬超は大急ぎで雄介から離れた。一方の雄介は特に気にした様子はない。幸村を朴念仁と言ったがこの男も大概である。

「にひひ〜、お姉様顔紅いよ〜?」

「た、蒲公英!?!」

馬岱は馬岱で顔が赤くなっている馬超をからかう。

(あ、この子とは気が合いそうだな)

そんなことを思った半兵衛だが、とりあえず聞きたいこともあるので後回しにすることにした。

「そういえばまだ名乗ってなかったよね。俺は竹中半兵衛、ちなみに姓が竹中で名前が半兵衛ね」

笑顔で自己紹介する半兵衛に今更ながら互いの名前も知らないことに気付く一同。一応、ここが後漢の時代だと解っている半兵衛はわざわざ姓と名前を分けて自己紹介する。

「私は、姓は森、名前を蘭丸と言います。よろしく」

次に蘭丸が柔和な笑顔を浮かべて丁寧にお辞儀する。

「米山雄介だ。こいつは俺の相棒で白雲という。それから……」

雄介は白雲の頭を撫でながら自分と愛馬の自己紹介をする。

「次は我の番か？」

「うわあ!？」

「ひゃあ!？」

雄介の言葉に続く形で何もない場所から、突然小太郎が現れる。馬超と馬岱はいきなり現れた小太郎に大声で驚いてしまった。

「…小太郎……」

驚くことを解っててこのような登場の仕方をした小太郎に雄介がジト目を向ける。

「…こいつは風魔小太郎…こんななりしてるが一応人間だ」

いい加減めんどくさくなったのか雄介が少々いい加減な紹介をする。しかし、小太郎は特別咎めるわけでもなく「くくく…」と笑っていた。

「じゃあ今度はアタシらの番だな。アタシは馬超、字は孟起ってんだ」

「私はお姉様の従兄弟の馬岱だよ！よろしくね！」

その言葉を聞いて小太郎を除く三人は啞然としていた。小太郎は「ほう…」と面白そうに笑っている。

「え〜と…馬超殿って…もしかして錦馬超？」

「お、アタシのこと知ってんのか？」

「ん〜、まあね。有名だし」

半兵衛の質問に自分の名が知られていたと少々、機嫌がよくなる馬超。ちなみに半兵衛は嘘は言っていない。三国志の中では馬超は有名な人物であるのは確かだからだ。

(なるほどね…ということは……)

馬超と馬岱の名前を聞き、半兵衛は少しばかり考え込む。このこ

とと先程の自身の推論を照らし合わせ、半兵衛の中ではここがどう
いう世界であるかが理解できた。

「で、あんたらどっから来たんだ？名前も聞きなれねえ名前だけど
……」

確かにこの国では雄介たちの名前は聞きなれないだろう。ちなみ
に字がないのは特に突っ込まれない。何せ、馬超の従兄弟である馬
岱も字がないのだ。

「わ、私たちはこの地の者ではありません。東の方にある島国から
来た者です」

咄嗟に蘭丸が誤魔化す言葉を言う。あながち間違ってもいないが
今はこれくらいしか言い訳ができなかった。

「そっか、だったらアタシらのとこに来ねえか？助けてもらった礼
もしたいしさ」

「蒲公英も賛成」

馬超の提案に馬岱も賛同する。彼女たちからすれば恩人とこのま
ま別れるのも嫌だったし、何より馬超や馬岱は西涼の主にして馬超
の母である馬騰にも会わせたいと思っていた。

「しかし……じゃあお言葉に甘えよっかな」は、半兵衛殿？

蘭丸の言葉を遮るように半兵衛がその申し出を受諾する。蘭丸は
何か言いたそうにしていたが、半兵衛に何か考えがあるのは明白な
のでその言葉に従うことにした。

こうして、雄介たちは馬超の母である馬騰が治める西涼へと向かうことになったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1537z/>

真・恋姫無双Chronicle

2011年12月9日01時06分発行